



Korean Street Musicians at Annual Feast of San Gennaro © Yuki Nakase

舞踊と舞台照明

アメリカ舞台照明の第一人者である照明家の Jean Rosenthal 氏は1929年に Martha Graham 氏に技術アシスタントとして雇われ、徐々に照明を手伝うようになることで、それまで照明デザイナーという職種がなかったアメリカ舞台芸術界に照明デザイナーという立場を確立しました。また Martha Graham Dance Company で Rosenthal 氏の跡を継いだのは Beverly Emmons 氏です。Emmons 氏は元ダンサーであり、アメリカを代表する舞踊家の Merce Cunningham 氏や Bill T. Jones 氏、Trisha Brown 氏らの作品の照明デザインも手がけてきました。舞踊と舞台照明デザインには何かしらの共通点があるようです。

まず、舞踊も舞台照明も「時間」という概念をもつ芸術と言えるでしょう。たとえば、真上に上げた腕を真下に下ろすという動きの場合、腕を瞬時に直線的に下ろすか、それともゆっくり腕が弧を描くように下ろすかでは全く異なる動きとなります。同じように照明デザインも、役者が卓上ランプのスイッチを切るのをきっかけに舞台が0秒で暗転するキューと、役者が椅子に座って涙を流すのをきっかけに涙が頬を伝うスピードで舞台が暗転するキューでは全く異なる画になります。舞踊も舞台照明も「時間」を含む創造であり、どちらも1つのポーズやキューから次のポーズやキューにどのように変化するかを考える脳が必要とされる点に共通しています。

さらに、舞踊家も舞台照明家も言葉にして説明しにくい感情や雰囲気、臨場感を現実化する仕事のように思われます。近年では William Forsythe の『Yes we can't (2008)』のようにダンサーの声や言葉を動きに加える振り付けが多く見られますが、それでもやはり振り付けを言葉で伝えるのは簡単ではありません。それは舞踊公演がダンサーの動きだけでなくダンサーの呼吸や熱、ネガティブ・スペースの空気の動きも含むためです。同じように照明デザインも、言葉にして説明しにくいのが特徴です。月曜日の朝日の場面と週末の朝日の場面は明らかに違う明かりをもっていますが、それは光の色と角度と質のコンビネーションであり、その2つの場面に対する自分なりの解釈を人に伝えるには、視覚的資料の提示が不可欠です。「あんな感じ」を理解し舞台上で実現し「そうそう！」とクライアントに言っていただくのも、舞踊家と舞台照明家の仕事に共通する点です。

舞踊と舞台照明デザインは、それぞれが助け合い必要とし合って変化と発展を遂げてきた歴史があり、舞台上の「時間」と「感情」を共有してきました。それゆえに Rosenthal 氏の功績のように舞踊公演から照明デザインという職業が生まれ、Emmons 氏のような元ダンサーの照明デザイナーが活躍するアメリカ舞台照明界があるのでしよう。